

# A Reprint of Teisou-onna-hachikenshi Vol.3

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 元 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6719">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6719</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 『貞操婦女八賢誌』—— 解題と翻刻 —— (三)

高 木 元

【キーワード】 南総里見八犬伝、為永春水、二代目為永春水、人情本、稗史ものの中本

前号に引き続き、『南総里見八犬伝』の改作である『貞操婦女八賢誌』二輯を紹介する。

題名からも分かる通り、本作では八犬士に相当する主人公達を八賢女（女性）に変えている。しかも、原作で犬塚信乃が女装して育てられたことを踏まえて、信乃に相当すると思われる於梅（梅太郎）は男装にて育てられ変生男子と記される。この第二輯では、もう一人の女装して登場する犬士である犬坂毛野に相当すると思われる於亀が登場する。石浜で舞子をしていた於亀は若衆に身をやつして扇ヶ谷定正の寵愛を受けた愛嬉の屋敷に奉公することになる。つまり、女装の犬士を、男装する賢女と逆転して設定しているのである。

また、犬塚信乃の伯母夫婦である亀笹・暮六や、犬山道節の乳母であった音音おとねと措平の面影をもった登場人物を描くなど、細かく原作を踏まえた人物設定がみられる。その一方で、第二輯では原作の筋からは離れて、於亀の出生をめぐる事情が、真間の里や市河（市川）、松戸など下総を舞台として、八賢女が生まれる前の親たちの世代のこととして述べられている。

その後、芳流閣の場面を踏まえた場面に展開していくが、地上の高楼ではなく、船施餓鬼のためにしつらえた大船の三重の楼上が舞

台となる。その船楼の上で梅太郎とその捕縛を命じられた八代とが、互いに仲間とは知らずに闘う設定となっている。

原作に出てくる村雨丸の宝刀は、ここでは錦の古箆で作った笹蔓錦の御戸帳（仏壇や厨子前面の仏像周囲を飾るための美しい布）や蜀光の錦となっていて、やはり転々と所持する者を変えている。

つまり、八犬伝の世界という大きな物語の構造を借りての改作であるのみならず、実に細かい趣向をも転用しているのである。

なお、二輯巻之一巻末に「門人校合」として狂文亭・為永春江と狂詠亭・為永春暁の名が記されている。『正史』は文庫「三編下巻」にも「為永連校正著」として両者の名前が見えている。「校合」の実体が何を意味するかは微妙であるが、『いろは文庫』には「校正著」とあるので分担執筆を意味していると取れなくもない。春水工房には大勢の弟子（為永連）がいて執筆に参与していたことが知られている。具体的な作業内容は良く分かっていないが、木越俊介氏は「為永工房発・読本の作り方」（『江戸大坂の出版流通と読本・人情本』、清文堂、二〇一三）で、「歌舞伎の作劇法をヒントに、場面の趣向をつないで。全体の筋を保つという行き方をとったのである」と述べられている。本作でも、同様のことが指摘できると思われる。

【書誌】二輯（三卷三冊）

書型 中本 十八・六×十二・五糎

表紙 濃藍色地に麻葉絞模様、丸紋中に一部杏色を施した女性を  
描き散らす。

外題 左肩「貞操婦女八賢誌三編上（中下）」（十三・三×二・七糎）。

題簽の上部から柿色、下部から空色のボカシを施す。

見返 なし（白）

序 「序引」干時天保巳亥孟陽「取上羊齋戲題」（序一オ）序二オ

口絵 第一～三図 見開き三図（丁付なし）。濃淡の薄墨による重

摺りを施す。

内題 「貞操婦女八賢誌二輯卷之一（一～三）」

尾題 「貞操婦女八賢誌二輯卷之一（一～三）終」

編者 「東都 狂訓亭主人著」（内題下）

畫工 「繡像英泉畫」（口絵第一図）

刊記 なし

諸本 館山市博・早稲田大・西尾市岩瀬文庫・山口大棲妻・東洋

大・東京女子大・三康図書館・千葉市美。

翻刻 前々号参照

備考 初輯を上下帙に分けたため、二輯の外題は「三編」となっ

ている。序者については未詳。後印本の調査報告について

は後日を期したい。

【凡例】

一 人情本刊行会本などが読みやすさを考慮して本文に大幅な改訂  
を加えているので、本稿では敢えて手を加えず、可能な限り底  
本に忠実に翻刻した。

一 変体仮名は平仮名に直したが、助詞に限り「ハ」と記されたも  
のは遺した。

一 近世期に一般的であった異体字も生かした。

一 濁点、半濁点、句読点には手を加えていない。

一 丁移りは「で示し、各丁裏に限り」のごとく丁付を示した。

一 底本は、保存状態の良い善本であると思われる館山市立博物館  
所蔵本に拠った。

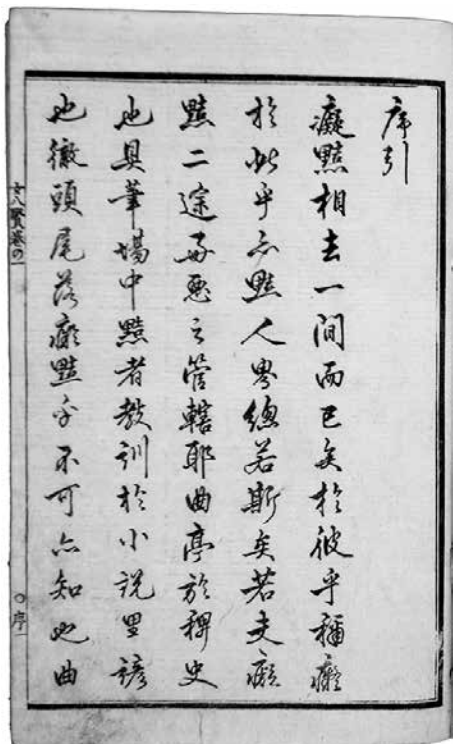
翻刻掲載を許可された館山市立博物館また漢文序の訓読をご教  
示下さった増野弘幸氏に心より感謝申し上げます。

なお、本稿はJSPS科研費JPTK02460の助成を受けたもので  
す。

【表紙】



【序引】



【貞操婦女八賢誌】

序引

癡點相去一間而已矣於彼乎稱癡於此乎亦點人界總若斯矣  
 若夫癡點二途兩惡之管轄耶曲亭於稗史也具華場中點者教  
 訓於小説里諺也徹頭尾落癡點乎不可亦知也曲亭疇有八  
 犬傳大動看官奇觀教訓之癡情亦慕彼點而之有八賢之舉讀  
 之能令看官感發名教樂地予於是乎言癡點相去頗一間々不  
 容髮今此舉癡乎點乎曲亭之犬也蓋堯狗之點乎教訓之賢乎  
 抑亦癡婦之一賢乎犬賢国音相近矣才子八人不才子八人  
 其癡點之間糺諸高場氏焉尔  
 干時天保己亥孟陽

取上羊齋戲題

羊齋常斐之印

亭疇有八犬傳大勅看官奇觀嘉訓  
之癡情と慕彼黠而之有八賢之學  
讀之能令看官威發名教樂地予於  
是乎言癡黠相合頗一間と不容髮  
今此舉癡乎黠乎曲亭之犬也蓋竟  
狗之黠乎教訓之賢乎抑之癡婦之

賢乎犬賢國音相近才子八人不  
才子八人其癡黠之間凡諸高場氏  
焉亦  
干時天保己亥孟陽

寂上羊齋戲題



犬賢集卷五  
一

序引

癡と黠と相去ること一間のみ。彼に於ては癡と稱し、此に於ては亦黠たり。人界總て斯の若し。夫の癡黠の二途の若きは、兩ながら惡の管轄ならんか。曲亭の稗史に於けるや、筆に具ふる場中の黠は、小説里諺に教訓す。徹頭尾落、癡黠なるか、亦知るべからず。曲亭、疇に八犬傳有り。大に看官を動して奇觀たり。教訓の癡情、亦彼の黠を慕ひて、之に八賢の舉有り。之を讀まば、能く看官をして、名教樂地を感發せしむ。予是に於てか、癡と黠と相合ること、頗ほ一間と言ひ、間に髮を容れずして、今此に擧ぐるは、癡ならんか、黠ならんか。曲亭の犬や、蓋し兎狗の黠ならんか、教訓の賢ならんか。抑も亦、癡婦の賢ならんか。犬と賢と國音相近し。才子八人、不才子八人、其の癡と黠との間、諸を高場の氏に糺さんのみ。

時に天保己亥孟陽  
(一八三九)正月

寂上羊齋戲題



序 2 オ

【口絵第一図】

由井濱の船樓に二賢女錦を争ふ



扇が谷の八代

豊嶋梅太郎

扇が谷侍女、腰越の海士乙女

『貞操婦女八賢誌』

【口絵第二図】

稲村崎の女隠居眞間の愛嬉月色を翫ぶ



眞間の愛嬉  
 從女從女舞子龜太郎



貞操婦女八賢誌二輯卷之一

東都 狂訓亭主人編次

第十三回

松戸の里に嫖客桃李を詠  
俠氣に依て花衣財主を嫌

葛飾や真間の千古奈と詠けいん葛飾なる真間の里に最有徳なる  
郷士あり其の徳を千古奈三郎と号し家八保元の古昔より源平両家の  
諸士に會合私の黨の地侍とを公役を勤め二百八十余年以來連綿と  
相續し財室ハ蓬萊の玉の枝燕窩の子達貝なんど、世に稀なるべき  
倚品を集めて家の四方に並べ倉庫に収めて毎年の靈拂と遠近の人も  
大賢三輯卷之一

女順礼  
未知名

行かれて木の下蔭を宿とせば  
花や今宵のあるじならまし

・啞方三人豊腹揃 全本 爲永春水作  
十五册 歌川國直画

・芳蕙好文士傳 初編五册 春水作 英泉画  
二編五册 了付

【本文】

貞操婦女八賢誌二輯 卷之一

東都 狂訓亭主人編次

第十三回

松戸の里に嫖客桃李を詠  
俠氣に依て花衣財主を嫌

葛飾や真間の千古奈と詠けいん葛飾なる真間の里に最有徳なる  
郷士あり其の名を手古奈三郎と号家八保元の古昔より源平両家の諸士に會  
合私の黨の地侍とともに公役を勤め二百八十余年以來連綿と相續し  
蓬萊の玉の枝燕窩の子達貝なんど、世に稀なるべき倚品を集

め家の四方に並し蒼庫に収めつ、毎年の蠹拂にハ遠近の人々が便宜を」もとめて珍器を一視なし度とて惱まで問はれしとぞされバ巨萬の金銀是を筭る還もなく金精の發音など四隣の人ハ言囃せり加旃田園夥く持傳へ是を奴婢等に農業さすれば食用に價を出さず八千代の末も這家の衰る夏ハあるまじと思はぬ人もなかりしとぞ其頃此所より程遠からぬ松戸といふ驛の船着に軒を並べし妓院あり戀が雀の付を移して最風雅たる妓女も夥く都に耻ぬおもむきハ後の世にいたりて聊似たる風情ハなけれど昔ハ全盛の一廓なりしが此妓院の中に千葉元となん稱樓に花衣といふ妓女あり天性の容貌艶美汎集落雁閉月差花と唐人ハ賞たりけん美人ハ這等をいふなるべきか笑を含ハ海棠の「露を帯て咲かゝるに勝れり猶梅の薫りを添て鶯よりも清き音聲なれば一席這婦に會する者ハ老人も若輩も忽ち覓を天外に飛し命をだも輕んずる嫖士の夥けれど花衣ハ放逸にして愛相を繕はず間來る客人を強顏款待て帰しけるが其艷色の世に稀なるを愛て猶懲すまに通ふが夥かり彼真問の郷土手古奈の三郎も何日此花衣に放心で通路の数を重ね情を運ぶ事しばしくなれど抑花衣ハ財に懐す恣の風雅たるに愛夏なれば三郎が人品賤しからず殊に黄金に富たれども更らうち鮮たる氣色もなく不會談のみなせしとぞ放下一頭且説市河といふ里に森下葉守

とて劍法の師範あり其子春造と」いへる者歳齡二十才ばかりにして容貌も美しく聡明にして温和なりさハいへ壯年におもむけば己が名に呼春の花の盛を思ふ頃なるに四方の満山笑ひ初て心に係る白雲と視まがふ弥生の春情に他の噂も好ましく松戸の里に移し植たる櫻山吹今を盛と聞からに漫歩行も足元軽く或日廓に趣しが花王の盛ハ言も更なり物言花ハ籬の中に咲乱れさも婢姑に粧ひつ、客待姿の種々なる天津乙女の人間界に下り遊ぶかと疑はる夫が中にも一個の美娼衣服の模様もうるはしく濃紫の衣の綾に梅の折枝と舞扇を彩色せしを着たる一際目立全盛の阿曾美が妙なる姿を春造も暫時站みて看惚けるを彼娼妓も外面を看とて「不圖春造と顔を視合せ何やらん心ありげに微妓し面の美麗さ正に花月を譬へても情の濃きハ這妓に不及風に誇引る伽羅の薫りハ春造の覓を奪ふされバ心躊躇て在ける中に日ハ山の端に近く没て入相の鐘を告渡れど廓にハ時こそいたれりとますく花街の賑ひつ、歸路忘る、程なれども有繫初心の覚束なくて意ハ後に引るれど堪へて家路に趣しが是ぞ惑ひを發すべき因縁なるか春造ハ其性正しき生質なれども今日烟花にて不圖も視し材の忘れ難く唯彼美女の顔はせの眼前に去らず在如く思ひ絶へんと幾度か胸の烟りを拂へども涙に哽ふ愚さを氣ハ悟ながら捨難戀慕の情念頻りに發り頓て「心を決しつ、翌日も





め  
目うつりの中に此花あの梢、万丁連 喬

松戸なる妓院さして急ぎ行き彼千葉元の樓に案内て如此々々の  
衣服を着せし全盛の婦人へと花車に尋る節しもあれ彼婦も同じ意な  
りけん問はれて欲き面色の無端を耻ひながら傍輩に相手となられじ  
とや却て花車に叫けバ思ふ同志なる初筵祭さへすへぬ款待に最賑  
はしき吉趣を爲たる後に花衣ハ他見を深く耻らひしとぞ奇きかな  
這美婦ハ光中將をも見かへらず巨萬の財宝も愛る支なく艶麗美貌  
類ひなけれど情に疎き遊君なりと陰言されし程なるに今日の初會ハ  
例に變て心を尽し春造の氣に叶へと笑しげに何体やら嬉しき模様  
なれば夥の女童唄女なんど集會し者も悦びて」<sup>3</sup> 弥興をぞ添たり  
けるがはや夜も更る頃になりて酒席も大略に鎮まりつ閨房へこそハ  
伴はれたり斯りし程にうち解て逢瀬も浅き所爲ならず互に語る縁に  
しの糸の結び目堅く誓ひさへ初見參の閨の戸に兼言泄なバ若為耻  
かしからんと思ふめり斯て別れの後朝に 曉 恨む鶏鐘も今朝よりぞ  
して推量る丈も届けど恋衣着せ着せらるゝ嬉しさに傳染句思ふ  
懸想文日に幾度か音信の聞ま欲きが互にて雨の夜雪の厭ひなく通ふ  
ばかりか花衣も帰しともなき心から身の爲ならぬと悟しても知り  
つゝ、留る居續に比目の契淺からず赤心明す嫖客ハ春造の外にあら  
ざれど」【挿絵第一図】<sup>4</sup> 柳街に立る悲しきハ金なければ何支も任  
せぬ廓の口惜く亦春造も一年餘り通ひ詰たる夥くの費へ當世ハ萬

に乏しくなりつ左有とて馴染重ねたる傍輩なんどハなか〜に義理  
機強く情もありて互の事と憐めど二階を守る老女等ハ響面するのみ  
ならず果ハ通ふを妨嫌思ひ出入に関を構んとせりこの故に春造ハ  
花衣を慕へども逢夜を我から憚りつ、顔見るのみにて立帰る胸苦  
しさの多けれど通ひし姿を格子の中にハ知らさで過し夜もありけ  
り係りし程にこがれ脳みてやるせなく一日逢ねば三秋の思ひに増  
る恋しさに身揚りてふ所爲も數を覚へず紋日物日の入銀さへ果し  
もあらぬ憂思ひ今ハ着替の衣裳まで不足がちなる謗<sup>5</sup>りを兼て  
悔しくあれど詮方なく春造も父の不興を蒙り顔を合する夏ばかり  
も遠ざかり行悲しさの中に便なき花衣ハ經水の巡りも止り今ハた  
しかに懐妊たとと推量にけれバ其由を春造の許へ告送り全く君の  
胤なれば出産し節ハ兎よ角よと兼々相談置ぬれども任せぬ浮世を  
かこちつ、泪のかはく違なし這時真間の三郎ハ花衣を恋慕して  
千々の黄金を薛散せば其心にしたがひなバ春造を見繼に便しけれ  
ど川竹の身に立難き松の操を張通し意地強くして過したるに當時  
ハ情人の爲なりとも迫りし時に折てハ是まで辛苦の甲斐なき業と  
なりなんのみか蔭言に笑はれん事も恥ならめ兎にも角にも春造主  
に克々相議ものせんと毎日に「送る玉章ハ認めるさへ目に立て  
心知られし傍輩にも隠すとすれど顕る、情の胤を妊せしまで言

る、怨徳悲しさの中に哀憎春造ハ何腹立て在やらん居立の路を断  
のみかハ音一言の報文もなさざる様になりしかバ花衣ハいたく疑ひ  
て偕ハ不宜人在て譏言など有しゆゑカ警奈可なる所爲ありとも  
一旦誓ひし丈夫の今更這身を捨らる、ハ余りといへバ情なしと恨み  
ながらも情と過越方を思ひやるに其馴染の花心弥生の空の空だ  
のめ放心に在せしを妾のみこそ惑ひ入る恋の山路の露深み濡たる名  
さへ立られて在ばかりかハ無間日赤兒も出産て二個が中の不変誓ひ  
になる事と樂む甲斐も情なき他の心と怨みわび千々に胸をぞ<sup>6</sup>痛  
めける斯まで思ひ煩ひ居る身とも知らねバ千葉元の樓に通へる  
客人ハ多分花衣の美形に放蕩て戀情をいどみ争ひぬ夫が中にしも  
手古奈の三郎ハ雨の日雪の夜の嫌ひなく通ひ續ていどみしが今ハ  
意氣地の憤怒を發し或日花衣に向ひて言よう奈何其方ハ何夏の心に  
障ることありてか一向に強類ハ動靜たまふぞ我ハ貴嬢を恋初て此樓  
に問來し寂初より寔の情ハうけねども此身の赤心を知らせなバ何日  
ぞハ解て逢夜半の雪の翌日に止らる、嬉しき節も來るかと心を尽す  
を憎しとのみ扱はる、ハ餘りにも心強しと怨ずれば花衣ハ微笑て數  
ならぬ身を左程まで戀はせ給ふハ何ばかり嬉しきことに「侍れども  
斯賤しき川竹の瀬にし立身を金銀にのみ任せ侍らば誰とて可愛と  
見たまふ夏あらんや又娼妓の意地てふものハ財宝に乏しき嫖客も心

の誠あるときハ苦樂を俱に誓ふこそこれ遊君の意氣地に侍り財主ハ  
 賤婦を哀みたまへど妾ハ生涯金のために身を任せても心をバ任せ  
 じものと此年來思ひ定めて侍るなれ財主にハ他に知られたる通家に  
 て在すれバ唯這上のお情に妾の夏を思し止りて此廓の中に多き遊君  
 の片屈ならで世にかしこきがしかも姿の美麗金を尊み侍るのが家  
 毎にはべるから夫等の許へ通はせたまへ妾に尽させ給ひたる実情の  
 半分を行たまはゞ奈何嬉しく貴意に随ひまゐらせ」<sup>7</sup>ざる婦女やハ  
 あるべきかならず妾が無禮なる言の葉なりと思したまふな氣隨を申が  
 財主への寔心にあらぬ艶言ハ却て不実に思ひ侍れバ艶なく返答ま  
 ゐらすのみ妾の夏ハなき縁にしと通路断せ給はれかしと放れ切し  
 花衣の言葉に手古奈の三郎ハ其夜も不快して鬱鬱とこそ帰りける

【挿絵第二回】



斯て手古奈の三郎ハ倩花衣の夏を案ずれば彼遊女ハ價ひを定めて  
 西門東戸の漂客に身を任すべき詭ある夏を思はで機とやら意氣地と

やらん我俣なる返答をせしを是迄温厚に會釈しこそ口惜けれ我  
 壯年とも真間の長者と稱へられたる身を以て一賤婦の爲に耻しめ  
 られ其俣に止なんや真の心ハ兎も角も吾一旦の情を果し彼が意地を  
 折きもせバ聊男子の所爲といふべしと一個心に問答て竟に娼家  
 の主に相議花衣の身請して宿の花となして是非を言はせぬ夏こそよ  
 けれと黄金に倦して千葉元に計はせ業引難しを無理押付種々に欺き  
 すかし頓て花衣を手古奈の家に送りしとぞ」<sup>8</sup>

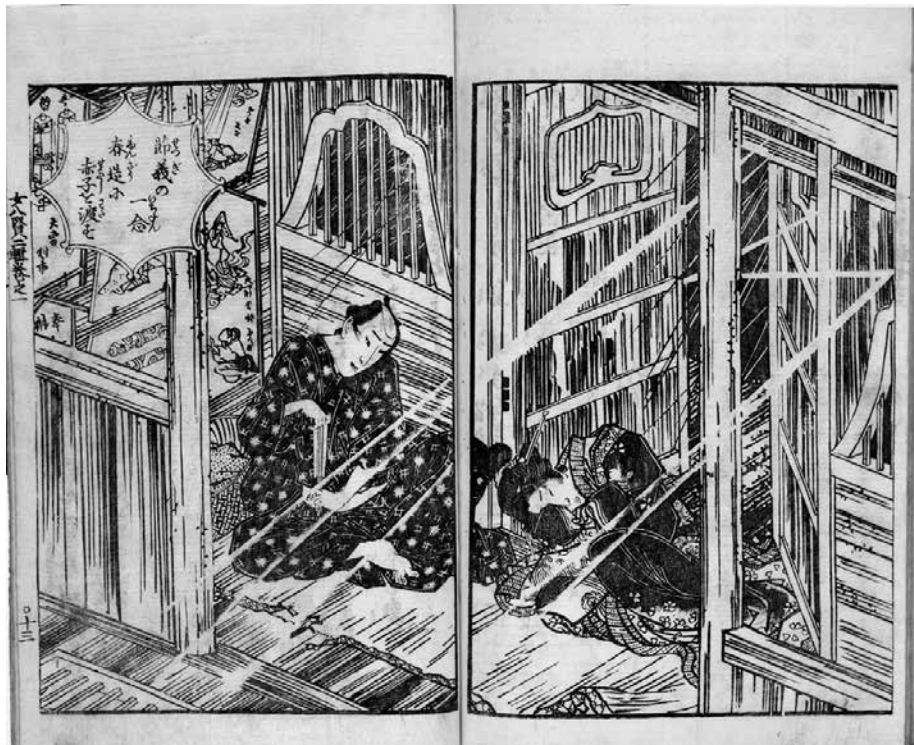
第十四回ノ上

籠居を出て春造花衣爲問  
 急雨を除と圓通大士宿堂

下説異条市河の里なる春造ハ花衣と深く契り通ひ路の繁かりしかバ  
 律義一哲なる父ハ大ひに憤り竟に便室に押籠て更に出入の口を閉  
 ひと逢夏さへも許さねバ唯々鬱情に迫り居たりしが此程風聞に  
 花衣の噂ありて彼娼妓ハ或人に身請せられて當時ハ松戸に在ずとい  
 ふにぞ母親ハ其由を夫に私語漸く春造の籠居を許させしが春造ハ  
 はじめて友人にも出合其身の押籠られて在し間の夏をくわしく聞バ  
 花衣ハ真間の里なる手古奈の三郎に身を購れて彼が別荘に困れて」  
 在由を告られしゆゑ心驚き憤りしが亦倩と推察るに我押籠られ  
 て逢夏を断しのみか便りさへ絶果たりし其中に真間の里へハ贖はれ

たるか兎にも角にも花衣の心底を問定めて實と不実を知るべきのみと  
思案を極め或日何氣なく家を出て真間の里へ行たりしが折から秋の頃  
なれば空定まなき雲の色忽地に結陰で雷の音ひびきわたり雨俄に降  
出て凌ぐ便宜もあらざれば彼方此方を見廻しながら喘々走りつゝ途の  
行路の辻堂に漸々と欠入て濡たる衣絹を絞りなんどし幽に照す燈明に  
唯看本篇額にハ金字をもつて圓通閣の三字を写せり正中の須弥壇の上  
なるハ海老鏡かけたる「筒の」厨子なり春造ハ心に思ふ様日来信じて  
利益を祈れバ只仮初に雨を凌ぐにも救世大悲の觀音薩埵の御堂にこ  
そハ入しならん這ハ有がたしと三拜しつゝ探る手元に線香の落散たる  
を拾ひとり火を移して是を捧げ普門品を唱へながら雨の晴るを待わび  
たるにますく烈しく降しきり雷光ハ草の葉を映し霹靂耳を劈くにぞ  
弥々神咒數百篇誦居たるに不測や頻りに睡魔を催しけるが此時外面に  
人の侍してけれバ何者なるかと伺ふ所に烈き風の吹入て燈明を吹消  
たり「モシ何人か知らなひが雨舎りならバ早く此間へお這入なせへ私も  
先刻から此所で霽間を待て居」ますといへど外面に在人ハ答面もなさ  
でしづかなるが唯激然と泣休にてまた赤子の泣聲聞へけれバ春造ハ  
甚あやしみかゝる夜中に嬰兒を抱きて來るハ何故と思ひながらも透  
し見て「モシくらやみでわからなひがたしか婦人か見と見ましたがな  
ぜ此方へハお這入なさいません子ハ、ア聴た私一個だから此様な所で男

と女の對座ハうしろぐらひ所爲だと思ひなきてか子決て私しヤアお  
心をお置被成様な者ぢヤアござりませんサア御遠慮なしに此所へ  
這入て乳をお上被成其所に居なされたといつても他人が難否をいふ日  
にハ同じ夏だサアモシ濡なひ中に此方へお這入被成ナト」言れて漸く堂の  
中へ入來り春造の前にイみしばらく言葉もなかりしが涙をうかめて  
か悲しき聲にて「モシ春さんおなつかしふござりますトいふ聲聞て  
春造ハうち驚き「ヤア左様言聲ハ花衣ハしほくとしていと哀れな  
此様な所へ來たのだノウト言バ花衣ハしほくとしていと哀れな  
涙聲「アノウ先日お前に別れてから子思ひがけなく他人に請出されて  
私きヤアモウく何様に苦勞を仕ますだらふ其前後の夏を文に書てお前  
さんの所へ知らせせて上ても使の人がお目にかゝる夏も出來なひけれ  
ば文をあげるたよりもなひと云て歸つて來ますしお前さんの」方からハ  
些も便りをしてハお呉でなひから相談をする人ハなし死なふと思つて  
もお前の胤の赤子が腹中に居ると思ふと慈愛そふでそれも出來ませず  
其中にハ何様かしてお前に逢れることもあらふかと詮方なしに廊をバ  
出ましたけれども始終これまで病氣だと言て別荘の方に煩つて居る様  
に寐てばかり居りましたハ「エ、それハマアとんだ夏たそして今夜  
ハ何様して此所へ來たのだ何にしても安心ならなひわけだノウ「サア  
夫から私の心にハ種々と考へて何様ぞ此赤子を産落してからお前の



節義の一念春造に赤子を渡す

方へ上て其後に自害でも仕ませうかと思つても私がお前を戀ひ慕  
つて居ますのハ身の勝手今居る所の三さんが澤山金を出してお呉の  
上に長く別荘に居て世話になると猶々恩を仇で返す様になつて罪が  
深くなりますから此も早く死んで仕舞てお前さんにも疑れなひ様三  
さんにも長く恩にならなひ様にと覚悟を仕ましたらバ夫を推量れて  
刃ものでもなんでも側にあるものを採上られて昼夜側に番をする人  
がありますから命を捨てる冚も出来なひ苦しさをマアよく察してお呉  
なさいまし夫だけでもお前さんもまた何様なに御家がむづかし  
くツても一度や二度ハ便りが出来そふなものだと恨で【挿絵第三  
圖】<sup>12</sup>居りましたハ左様いふ冚ならバ恨んだも尤だが此身の方  
もなか／＼自由に便り所か一間の中へ押込られて出口へ錠をめて置  
れたものヲ左様でござあましたか夫でハ文を上ても届かなひ  
はづで有ました子エそれからノウ私ハ是非死ふと思つてもまもりて  
居ますので夫も叶はなひのを漸々と透を看あはせて存念を果して  
エ、一ちりの浮世を跡に看て観音さまの淨土とやらへ往生をと  
願ふ心にあきらめても引戻される煩惱ハ忘れかねるお前のおまこと  
に苦しい今の身をよくマア察してお呉なさゐヨトさも哀れげに見へに  
ける」<sup>13</sup>

第十四回ノ下

花衣赤子を春造に令抱去  
慈兒悔て春造に語花衣事

再説花衣ハ涙に哽びて在けるがそも愛着ハ他ならず誓ひし言を忘れぬ君の面影眼に付て正念を妨ぐる絆となり悶へ苦しむ折からに胎順不足も平安と生産たりしハ是這兒健にして骨逞久後君の爲にもと観音菩薩に願ひを立一暫の還給りて今夜僥倖妾が故にと嬉しくも亦難有御心を腦まし給ひ這所へ來まして在する由を知る夏の侍りしかバ這赤子と与連參らせんと斯ハ黄泉を漸と頭はれてこそ參りしなり愿ふハ這兒を養育給ひて一哀れとハ見給へかし妾ハ草葉の蔭よりして他所ながら守となり赤子の身に添ひ侍りなん餘波ハ尽ぬ言の葉に君の御聲の魂に染て弥々輪廻にさまよひ迷ひの種とハなり侍る女心の淺間しや大慈大悲の井の誓ひハ廣大無量に在ませども自ら着し自ら執する煩腦の魔に迷ふをバ救はせ給ふ方便なしとや聞ハ寔か悲しさに我から苦しむ地獄の責今ハいとまを告參らず後世を吊ひ賜はりねと言かと思へバ幻の恣ハ消へて烟りのごとくはかなき影に春造ハ赤子を抱て半狂乱歎き悲しむ耳の元に最も妙なる御聲にてやよ春造安堵て聞け汝等夫婦の信心に依て我圓通の神力を加へ愿ひを叶へ」とらするぞと聞よりこれハと驚き覺れば物身すべ

て汗を流し仮寐の夢にてありければ四辺を看るに此時ハ雨降止て月明く千草の虫の音哀れを漆へ淋しさいはん方なき折不測や赤子の泣聲側に聞へければ再度驚きこれを見るにまさしく夢に見留たる赤子に替ねバ春造ハまづ抱き上いたはりながら情と考ゆるに疑ふ夏なく正夢にて花衣ハ我を慕ひ貞節を立通し三郎へハ言訳尽て竟に自害をなせしものか然るにても我胤を身にやどせしを筭ふれば八月ばかりになりもやせん在斯バ是ぞ我兒にして戀しき妻の像見なり噫我ながら愚なりき押籠られて在つる中も密に脱出逢まみえ一絆の子細を語り聞せ彼が浮身の動静をも問ひ慰んと思ひしハ幾百度の夏なりしがよしや人にハ知れずとも父母の憤りを恐氣なく私情を身俣になさん夏人たる道にあるべからずと戒め過して悔しけれと言てかへらぬ繰言なるか遮莫花衣が幽魂宙宇に迷ひ居らバ我言夏を聞ねかし早く逢相見ざりしハ千般百回悔るとも又甲斐もなき所爲なれば唯此上ハ何夏も定まる前世の宿業と思ひあきらめ一毫ばかりも陽世に念を止すして常に信ずる觀世音の現に在せる南海の補陀落浄土へ往生せよ夫人間の靈たるや天地の間に生たる物の長とするハ正しき道の教を立能行ひを糺すが故なり然るにおん身の」  
【挿絵第四回】貞操ハ古今の賢女の類ひに耻す最清潔所爲なれども物に羞しておろかなる心を穢土に残す時ハ正果の端をも得る夏なく三惡道



撫子にかゝる涙や楠のつゆ

へ墮落せん然ハ言此身も其方故に迷ひて這所へ來しものなれば正理を  
 説も烏呼がましけれど聖僧の言葉を用ひしておん身の爲に論すべし  
 夫執着の念に依て幻しの付をあらはし在斯所為の支あるハ珍らしか  
 らぬ業ながら迷ふも悟るも毫末の境なり凡生とし活るものハ独生  
 れて獨死す蜉蝣の一期槿花の榮へかならずしも羨むべからず我身  
 も今より棄門の數に入貴嬢の爲に菩提心を發し後生善所の供養を  
 なさん又此赤子ハ兎も角もはかりて養ひ壯健に<sup>16</sup>成長なさせ世に  
 立つし左もある節ハ有為の浪寄てハかへる風さはく娑婆に心を止む  
 ハ益なし夫悟道の歌にも説よしあり

さまざまにたくみし桶の底ぬけて

水たまらねば月もやどらす

おもへかし悟れかし四大一圓破して且何にか倚ん二氣散乱して更に一  
 物なしとハ説給ひぬ佛果を得よや花衣と在すが如く練かへし南無大  
 悲圓通薩陁たすけ給へと念じつ、赤子を肌<sup>17</sup>に搔抱き念々魂路とやう  
 たふ鳥妻ハ空にて血の涙係る所を跡に見て其身も泪の露雫力な  
 く〜真間の里の手古奈が構へし別荘へ尋<sup>18</sup>いたりて三郎に對面な  
 したきおもむきを叮嚀に言入れいひ入れ彼人も邪氣に障られ二三日實家  
 にかへらず這別荘にうち臥てありけるが春造の頼を兼諾やがて  
 一間に請じ時候の挨拶に及びしかバ春造ハ遠慮ながらも花衣の身  
 の上の支を問ふに三郎ハ不興なる体もなく奈何にせしか眼に涙をう  
 かめ<sup>19</sup>「イヤ其花衣ハ昨日の夕方不便の支をいたしました卜前後の支  
 をくはしく語り<sup>20</sup>」よく〜思ひ追つたことか側に人のなひ折をう  
 かづて庭の古井へ身を投て哀な取期を仕ましたと聞いて此方ハ左も  
 あらんと兼て覚期ハ有ながら又今更に胸轟きしばらく言葉もなか  
 りしが漸くに心を鎮め三郎へ<sup>21</sup>「向ひ只向に不慮なるを託て身を  
 卑下し彼花衣の許へ通ひ初しより昨夜の夢のことまでもくわしく語  
 り<sup>22</sup>」お心に障ります様な支をながく〜しく申てさぞ傍の思はくもと  
 御腹立てござるませうがお心廣い御器量と兼はつて居ますゆゑそ

れにあまへて段々の支をもお咄し申ます何卒失禮を御免被成て此上ハよろしく御才角の御差圖をもお願ひ申度ござりますトしほくとし物語懐中に抱きし水子を見するほどに三郎をはじめ側に居合人も膽を消し寄集ひつゝ是を見るに兎ハ眠りてありつるが此物音にうち驚き一聲高く泣出せば三郎ハその始終嘆息のみに在り」けるが思ひ付て横手を打「イヤしかし丁度いゝ幸いな支が有ます此別荘の留守居に頼んで置夫婦者が長家内に居ますが十日ばかり以前に産をして乳が多分に出て困るといふ事だマア早く乳を吞せるがよからふ」  
夫ハ實に這兎の僥倖でござります左様ならば何卒仰にしたがひまして「ナニくちつとも御遠慮なさる支ハないト直さま乳ある人を呼び其兎に乳房を含ますれば最嬉しげに吸ふ風情愛らしくもまた哀れなり」サテモシまづ此兎をバ此内宝さんに任して置いてマア奥へお出なせへまだ種々と深ひお咄しを仕度支もあるからト春造を奥へ伴ひ」密やかなる間に入りて傍へ人を近付ずして膝をすゝめ「トキニモシ春造さん花衣が死たた所で斯言出すと外聞を悪く仕まひと思ふ眞惜みで虚言を言かと疑がはれる訊だが實ハ左様いふ支でなひから能聞解てお呉被成しかし他人に氣どられまひと余り深く遠慮を仕過してまだ昨日までも花衣にさへ私の実意を明かなひから慕なひ死をも遂させた後悔の支だが子正直に言と私が花衣を身請したのハ浮氣な支でも

なければ意地づくと言でもなし其竅初からお前が深く言約束したお人だとハ知つて居ましたがお前が親御の腹立を請て押込られて」居被成支を聞出して花衣が辛苦の不便さに身請をして此所へ置たのハ頓てお前の勘氣同前な不首尾も直て内外のことも済だらバ其時何様かしてお前にお目に係つて相談をして花衣をお前の女房に持てお貰ひ申さふと底心を定めて居ましたがト聞て春造ハ眉にしはを寄せ「何か深ひ思し召の在つた支でもござりませうが廓に勤た花衣を其様に御不便を加へられますお心の底ハ何様言御思案から出ました支か何分私にハ思ひ寄せられません支で」されバサそれを滅多にハ口へ出して言れなひ理があるゆゑに是まで少しも人に知らさずに置ましたがト四辺を見」廻し小聲になり春造の側に寄「モシ寶ハ花衣ハ私しの爲に腹がはりの財でござりませ」エイスリヤアノ眞間の長者トよに聴へた其許さまの御財でコレハ存じがけなひ花衣の身の素生「兄の身分で妹とも知らせず過した其子細ハ一朝一夕のお咄しにハなりかねますが大略お聞せ申ますから他人に知られて被下ますナトこれより手古奈の三郎ハ其身の所存家内の始末をくわしく春造に物語る這ハまだ最も長々しく看官倦もしたまふならんと一休はなしを次編にゆづる是六の巻に記したる石濱の於龜が父の傳なれば後に此條下を繰かへし照し合せて見たまへかし」



○此一冊ハ八賢女がまだ幼くまたハ世に生れ出ざる節の緯なれ

バ其心得にて本傳と混じたまふべからず追々綱編をよみ給はゞ  
委しく知る由あれど爰にハ紙員の限ありて任せぬのみか作者の  
愚案思ひ余つて筆動す只管愛顧を愿しと言

門人校合 狂文亭 爲永春江  
狂詠亭 爲永春暁

貞操婦女八賢誌二輯卷之一了<sup>20</sup>

貞操婦女八賢誌二輯卷之二

東都 狂訓亭主人編次

第十五回 妬婦胚身正室仇す  
聖法力を以て靈を鎮

再説そもく花衣の素生を悉細こ、に尋ぬれば。其爺親ハ左門  
と稱て則ち手古那三郎が実父なり母ハ左門が妾にて名を三輪木とぞ  
呼れけるされバ花衣ハ三郎と腹変りの兄姊なりさて彼三輪木ハ真間  
の里なるいとく貧しき者の娘なりしが容兒の美色きに依て年齢  
十七八歳の頃より白拍子の業を勤め諸方の人々に招れ行酒宴の興  
を催しつ、細き烟りを立たりしが父ハ早く死亡て母のみ一人ちから  
草老ゆく末の遠からぬに暫時なりとも安樂やしなはんとの心に兼  
てより手古那左門が彼是と不便を加えしゆゑ頓て妾となりつるが左  
門にハ本妻あれバ時節を見合せて家内へ入なんまづ夫までハ母もろ  
とも今の家居を造作して心置なく活業かしと其手當など心付何く  
れとなく世話すれバなかく心に心安堵て今ハ酒宴の席にも出ず左門  
をのみ大切になをざりならず心を用ひ月日を送る其中にいつしか左  
門の種子を身に胎し酔きもの好む三輪木の風情母ハ嬉しき其中に案  
じも<sup>1</sup>すれバ耻かしと隠す心の娘をさし置き左門に斯と告げしか  
バ左門も悦び一方ならず先にハ本妻に男子を産せ愛度ことに思ひつ

れど余り一人ハ心細し夫をまた更に三輪木の懐胎嘔を聞き最嬉しく時節もいたらバ母子とも家に引ととり養ひて一家の榮を俱になさせん夫を樂しみに娘にも心つよく思はせよと母にくれぐうちかたらひ猶三輪木にハ陸言の末は斯せん斯すべしと心の底にハ左ほどまで思はぬ支も男の遊言嬉しがらす安堵に又恩愛もかさなりけん折節てハ三四日或ひハ四五日日夜を續けて三輪木の家に起臥して厚き恵みの数そひて」母子の僥倖大かたならず實に世上の人心足に任せて物不足慾ハ利のみか戀も又限りなれば片時もはなれともなきこゝろから逢初しより最深き途瀬を恨み猶不足と我から罪をつくるもありて末の松山浪も越す歎きとなるが多くあり今此條下を讀たまひて婦女子の慎としたまへかし」今日ハ何様だへ」ハイ何も氣もちハ悪くハござるませんが子臍身の所爲か起居が不自由ッて行ませんハ」左様か夫ハ何様しても太儀だらふヨ此身も何程か案じてハ居るけれども産道ばかりハ男にハちつともわからなひ支た詮方がなひのヨ夫だけれども」ママ母人が付て居る」から」安心だ」アノウお聞申スのも申難ひ支てござるますが子私がお種子を首尾よく平産ましたらバ私をバ何にして被下ますエ」何とハ身分の支か」ハイサ御部屋とか御本妻とか申申ことを」今さら改た支をいふノウ今でも家内の納得次第で何様でも仕様ハあるけれど近隣への遠慮家來の思はくを難て

居るのヨ妻の心に妬みをする様な支ハなひけれども三方四方の氣が揃はなひと和合行なひから」マア」モウ少し辛防して居るが能くよく言て當坐退れ三輪木の本性を知るゆゑに理非を正しく言不聞ものやわかに會訊ければ」それハモウ幾日でもお待ち申ますが」子ト左門の顔を看つめて」アノ子」何だ」ヲホ、、、アノこれハ只私が仮初にお聞申スのでござるますが子アノウ御本妻が被御座ないと私の様な者でも正室にして被下ますか」それハ今の様に妻さへなくハ其方の行儀次第で何様ともならふけれど當時の所でハ何様も詮方がなひ」左様なら只今にも恐ながら御正室に若もの支がござるましたらバ必ず其のお言葉をおわすれ被成ますナエト念をおしたる女の痴情左門ハ何とやら心に當れど病人の氣に障らんも如何なれば其日ハ機嫌よく家に歸りしが獨」情思ふ様三輪木の生質斯までに癡なりとハ」推量ざりし我本妻に故障をなすといふまでにハ有まじけれども婦女のせまき心中より万一何様の所爲を巧みて家に係る惡名を我代に立むも不快ざりとてさすがに我種子を懷妊であるに別離て餘所になさんも情なき業なり兎やせん角やと思案を做すに只以來ハ往來を疎くし自ら愛念の薄くなるようにはかるの外ハ有まじとそれより例日の如くに不行只折節の音信に文など送りて安否を尋ね家内の尋用を言たて、両月ばかりを過しけるが其頃左門の正妻なりし楓とい



妬婦の痴情左門に愛をうしなはる

ぶが煩ひ臥て更に医師の業に不及妙薬といへども効験なければ家内  
 の「挿絵第五回」案じ一方ならず彼是と評義すれども病根何と  
 もわかりがたく数人の良医の思案にもれて日に増花の姿さへ枯木の  
 様に瘦衰へ内外の知己氣の毒に思はぬ者もあらざれば左門をはじめ  
 実子なりける三郎ハ孝心ふかきものなるゆゑ幼子けれども老実昼夜  
 をわかつ母の側を去すにおろくするさへ哀れなり此節異かな  
 楓の容体氣質まで平生に変わりに荒々しく殊に実子の三郎を憎み叱り  
 などする度甚しく邪見の形容を顕しければ左門ハ心中に思ひ當れ  
 る度ありけるゆゑ近き山林に引籠りて行法すませし聖憎の許にいた  
 り邪崇をはらひ除き貫はんと其草庵に参りければ奇なるかな此  
 聖憎ハ神通力の尊者にてありけん左門の言葉を待すして「イヤこれ  
 ハ手古那の長者どのか御内室の病氣の祈禱の度で参られたらう  
 サア御同道申すでござらう今隠居いたしても元ハ旦家のその御家  
 兼て噂に聞きましたといはれて左門ハ呆るゝのみ頓で連立家に帰り彼  
 阿闍梨の指掌に随ひ病人楓の前に檀をかざり金剛密具を如法に安置  
 し阿闍梨ハ口に咒文を唱へ左門を側にし置漫に他人の出入を許さ  
 ず既に祈禱の法を修し最高らかに鈴を打ならし大喝一聲眼をひらき  
 て檀の上を白眼詰「汝」しらずや人間人の執情一念纒に動けば  
 阿鼻の炎盛に焚火車鬼卒地下に怒る汝ハ我を知らずとも我能汝を

悟つたるぞたとへ奈何に隠すとも不動火界の咒文を以て汝が邪心の居所を焼べし出よ名のれ。ト責かけて声も烈しき老憎の法力空しからずして楓ハ忽ち身をふるはし左門を見て潜然とうち歎き「ア、モウくお祈りを何卒お許被成て被下まし今まで包み隠しましたが心を改めて申ますトいふ声音ハ楓にあらで左門ハ兼て覚悟ある三輪木の音声に相違なければ左門ハ思はず膝を進め胸を痛めて猶豫バ阿闍梨ハ念咒の文を寛め「少しハ許すさりな」<sup>6</sup> がら夫人を腦ます支なく左門殿にいふ支あらバ早く申て立退けヨト慈悲の詞に合掌する楓が容体ハかはらねど声ハたしかに三輪木にて「左門さま今ハ何をかおかくし申ませう実ハ私ハ三輪木でござぬます嫉妬ハ女の謹みながらお種子を姪した其後からして御本妻がなくハ何様か私の様な者でも貴君のお側に居られませうかと存じました一念が御耻かしい支ながら楓さまの御身に徹しまして此間中の御腦み只今の私のころでハ其様な支ハ思ふまいと存じましても一旦發た私の罪障が重うござぬますゆゑ自由に進退も出来ませず此嫉妬の罪咎て後生ハ紺青鬼といふ鬼に生かはると」いふ誰が言の葉か耳根へ貫様な恐ろしき御卒お慈悲に聖人様の御追福をお願ひ申上ますたとへお種子を産ましても御家へ御引取被下ますな切て此身の産ました小児のまで浮苦勞をさせるが御家に仇をした三輪木が罪を滅します道理御不便にハ被御

座ませうが左様なさつて被下まし何を申上ますも。アレ身をなやます罪の責お名残をしい何様せうトいふかと思へバ忽ちに楓の躰ハ床の上に倒れて正躰なかりしが彼聖人の祈念に依て夢の如くに全快して病中の支ハいさ、かも知らず又左門も其故を楓に告ねバ三輪木の支もその頃に絶て沙汰なく過せしとぞさて「亦三輪木の家にてハ手古那の祈禱の節なりけん」コレサくお三輪やくなせ其様な悲しひ聲をするのだへ目を覚しなヨ「アイくア、引怖かつた夢か子へ」夢か子へと云たつて此母が知るものか「異変な支を言嬢だヨヲホ、先刻から呼覚したの知らなひのかそして何ぞ怖ひ夢を見たのかへ」<sup>三</sup>「ア、モウく怖ひとも苦しひとも言様のなひ支てありましたハ何卒湯でも水でも少しお呉れナトいふを聞より母親ハ今煎じたる薬を汲來りて介抱し臨月近き娘の病氣いたはり慰め過しけるが三輪木ハ夢に見たりしのみか心に徹せし嫉妬の罪おもひ廻せば」おそろしき手古那の前後我一念の執ねくも楓さまに「着崇病苦に腦ましさまぐ」の非道支まで言罵憎らしき所爲をなせし上ハ奈何不便と思ひし人も愛相尽さる支やあるべき我心にも恥かしき因果の業か情なや現在母にも斯ありしとはなしもならぬ夢の体相つくりし罪の悔しくも胸いと苦し此身の咎死ぬるがましの事なれど今死行バ懷妊の赤子を闇より闇に迷はせて又猶さらの罪ともなるべし兎にも角にも身一ツを置所なき葉末の露と

くにも消なバ斯ばかりの嘆きハよもや有まじと親を思ひ子を案じま  
すく重る産婦の腦み其後女」<sup>8</sup>児を産けるが斯る歎きの積りし  
ゆゑにや幼児を跡に残し三輪木ハ竟に世を去りぬ母ハ悲しさ限りな  
けれど娘なけれバ詮方なくひそかに他人を頼みて左門に告しが左門  
ハこれを不便に思へど内外の者の諛言も家の耻ぞと心得てひそかに  
三輪木の母の許へ月日を過す料を贈りて彼幼子を育させしがその  
赤子をばお花と呼び祖母の介抱麗畧なけれバ蟲氣もあらで育ちしが  
お花が三才になりける年祖母もはかなくなりし後お花ハ便なき身と  
なり養ひ親の手にありて果ハ手古那の縁も切れてや運わろくして  
松戸なる千葉元の娼妓とハなりしとぞ斯て手古那ハ「三郎の代とな  
り真柴といふ妻もあり又勝美といふ妾もありしが不圖花衣を見初し  
より妲と知らで通ひしが花衣更に情なく三郎を側にも寄せねバ  
意氣地となりて身請せんと其身元を探り問ひしに豈はからんや亡父  
左門の妾なりける三輪木の腹に出生なせし娘にて同じ種なる妙な  
りと聞て大ひに驚きしが妲と知りてハ猶更に捨もおかれぬ亡父の  
かたみと思へバなつかしく春造の妾も聞傳へまづ倡家より引と  
てと心の底に末々をも深くはかりし事なるに彼花衣ハ入水せしと  
ぞこれより後ハ巻を重ねてお亀の傳にくわしくしるせり」<sup>9</sup>

## 第十六回

錦旗を呈して真弓花之方近  
長谷寺の境内に於陸茶を齎

爰に仙卜神女真弓稚名於道ハ笹蔓錦の旗を得て鎌倉に趣き便宜を  
索め扇ヶ谷の奥方花の方に呈し笠森觀世音へ奉納せらる、御戸帳に  
用ひ給はん支を告奉り其恩賞にハ御側近く給仕度よしを願ひけ  
れバ花の方ハ大ひに喜悅給ひ唯山内の奉納に勝べき錦を參らせた  
る功有者とのみ賞美あつて深くも於道の素生を尋問られず直に従女  
の中に召出されて心置なく古參にかはらず是を仕はせ給ひしが於道  
ハ天性の美質にて扇ヶ谷の奥方に給仕する女中の中にハ「並ぶもの  
なき容色なれども初て見參の折節にハ兼て所存のありけるゆゑ  
髪形容より化粧の風体を最おかしげに取締ひ田舎育の處女のごとく  
出立たれバ御殿の人々左までに心も留ざりしが側近く召仕はる、  
の節に至りて最初の化粧とはるかに変り衣裳の着様衣紋付人品尊位  
威を備へ素顔の白く艶潤さまハ紅粉を彩色たる女中に遥増たれバ花  
の方をはじめとして多くの女中ハ呆る、ばかり其艶色に耻らひて  
自然と於道に威を取られ會釈も麗略ハなかりしが於道ハ萬端に心を用  
ひて上を敬ひ傍輩に睦しく朝夕勤めに油断なく忽ち古參の上に立花の  
方の御側さらすと衆女是を敬ひけるが於道ハ偏に時節を窺ひ定正

に<sup>10</sup> 近づき父の仇を復さんと思慮をめぐらし居たりしが此頃定正ハ五十子の壘に赴き夫より河肥に順歴して鎌倉へ帰らせ給ふと聞えしかバその期をこそと心に待しが時しも弥生の初旬なりけん彼笹蔓の錦を以て御戸帳を仕立給ひ此月の十七日にハ上總の笠森へ奉納あれバ其以前に由井の濱に船飾整して大施餓鬼を催すべし尤女人の面尙なれば船長篙工の外ハ男子を船中に件ふべからず但し是を拜まんと思ふ者あらバ自他平等の供養なり貴賤の参拝を免すべしとて前日より其吉を觸示されければ聞傳へたる貴賤男女由井の濱辺に群集して未明より船出を相待今かくとさゞめき合ふハ開帳佛を出し迎ふ講中ななどがござるに等し這何故に上總國へ送れる戸帳を仰々しく鎌倉におゐて他人に視せばやの所爲をせらるゝ、支ぞと審に全く我侬の所業なれば追善菩提の本意にハあらず山内より奉納ありし蜀江の錦の御戸帳にも勝れる古渡無類の珍物笹蔓錦の御戸帳を扇ヶ谷の奥方より上總の笠森へ奉納せらるゝと世上に弘く言觸さして山内の威を折く心の底の巧とハ密に推量ものも在しとぞされバ三月初の七日巳刻の頃にいたりて兼て用意を調へたる花の方の御座船にハ大サ凡八間ばかり漆板の方より艫の方に至る迄光り輝く金具を打つて二階造の上下にハ障子をたて紫文白の幕を張渡し奇<sup>11</sup>麗莊觀目を驚かす形容なり亦奉納の御戸帳をバ一艘の異船に舟楼

を高く修造三重の頂上に紫の天幕を張て這所に笹蔓錦の御戸帳を崇々しく飾り置その下の間にハ大なる香炉を備へ貴賤を不論焼香を許し名木一炷を備ゆる者ハ名目を記して永代笠森寺の過去帳に留て現當二世の安樂を祈らすべしと參詣の男女に告られしかバ這ハ有がたき御説かな斯る御法の折節に下さまの我々が上と俱に菩提の心を發して些のものを供養する支を許し給ふならばなとて香料を惜むべきとて由井が濱辺に寄集ふ貴賤の男女ハいふも更なり遅れてこれを聞傳ふ市中の道俗信者伽羅沉香を携持て這所<sup>12</sup>彼所より小船に乗て岸を沖へと五六丁隔て碇を下したる船楼を目當として乗付く焼香に時刻をうつすも晴やかなり斯てまた鎌倉なる花盛場多きそが中に靈地も清淨法庭大慈大悲の境内ハ廣大無辺の御利益と春夏秋冬嫌ひなく參詣下向の群集して押合人の中見世や手遊び人形諸商人軒を並べて繁昌ハ譬て言ん方もなく賑はふ御堂の西東粹も不粹も汲分て出す煎茶の色もよく色を競ふて水茶屋の最數多なる處女等が笑顔つくらふ愛相に引れて尻も長床几竟淨されて喜瀬川や長き日影を宮戸川のなき中に<sup>12</sup>船屋のお亀と呼れしハ其頃名高き評ばん乙女元ハ武藏の石濱にて舞子をなせし者なるが心に深き望みあれバ相模路さして趣きつ今鎌倉に身を落付け此所に茶店を出せしよりまだ幾

程にもならざれと古今に稀なる艶色ゆゑ是が爲に胸を焦し心を痛めて折節ハ浮たる支など言ひかくる薄客さへ多かりしかどもお亀ハさらに心を移さず唯よきほどに言ひなして爰に日数を經るほどに今日ハ殊さら由井が濱に那舩樓の催しありとて此辺りさへ賑はしけれバ客待顔に早朝より「酈をひらきて居る所へ六十才ばかりのひとりの老女四辺見まはし店先よりずつと入つゝ片辺なる牀几に腰を打掛てお亀に對ひ打合笑髪うらほまみかみの飴りの花表はなうらやかなると衣服の模様もやうの質素おとよぎを誉ほめなど為つゝ、扱言さていふやう吾儕わがしが態々來た子細しさいハ豫てお前のお話語はなしに稲村いなむらが崎さきの女隠居真間おんないんまの愛嬌あいぎやうのお屋敷やしきへいかな賤しい勤つとめにても御奉公ごほうこうが為ためたいとか常々つねづね噂うわさがあつたゆゑ吾儕わがしもいろ／＼氣を揉もんで那方かたさまの様子やうすを聞きくにあの御隠居ごいんきよハ日外いそぎより扇あふぎが谷家やつかに取入とりいれて大侯おだいこうでも及およばぬ暮くれし夫故それゆゑ日毎ひごと」に驕奢おごりが長ながじあるとあらゆる樂たのしみもはや為なりししが此頃このころハ若衆わかしゅの舞まひが見みたしとて男をとこの兎うにて舞まひの手に關たけたる者ものを抱かへたと鎌倉中かまくらぢゆうを尋たづぬるよし其処そこで吾儕わがしが思おもふにハお前も元もとハ石濱いしはまで舞まひ子こを為したとの噂うわさなるに常つねからお前の様子やうすを見るみるに立振舞たちまひなら才智さいちなら男をとこといふとも恥はづかしからぬお前の氣性きせうと知るゆゑに吾儕わがしが趣向しゆかうでお前まへをバ假かりに若衆わかしゅにこしらへて那お屋敷やしきへ出でたうへでハ其処そこハお前の才覚さいかくで男をとこ通とほす事ことにもならふお前の心こゝろハマア何様なにかといはれてお亀かめハ打点頭うちうなづき「何時いつに替かはらぬお前の信切假令しんせつたとい如何いかなる憂うれ

所わざなし為なして一度愛嬌いとあいきさまにお目めにかゝりて唯一言ただひとこといひたい事ことがあるゆゑにお前まへを憑たのみし甲斐かひありて便宜たよりを得えたる嬉うれしさよ那方かたさまに逢あはるゝなら若衆わかしゅハおろか奴やつこにも此身このみをやつすハ厭いとはしからずよきに計はからい給たまはれよと聞きて老女らうぢよも笑たましげにお前まへが然さういふ心こゝろなら先さきハ何様なにかとも此姥このおばが舌したん三寸さんすんで言いひまはせば必ずかならず任まかせて置おかしやんとい言いへバお亀かめも含笑ほゑみて此身このみに願ねがひあれバこそ女子をんなの身みにて大だいそれた假かりにも男をとこと姿すがたをかへ人を偽あそび」く耻はづかしさよと言いひつゝ、跡あとハ胸むねの中うち言いふにいはれぬ身のうへを夫それぞと余所よそへ知しられじと吸すひ付つけて出す長管ながかうの喜世きせ留せもうさを忘れ艸くさう老女らうぢよハ深ふかき事情じじょうを知るや白髮しらがの老おいの身みを最いと美ま面めし氣けに付つけて出す喜世きせ留せを取りとて完に尔にやかに再度ふたたびお亀かめに打うち對むかひお前の利發りはつを知しりながら言いふも愚おろかな事ことながら當時たうじときめく管領家くわんりやうけの御意ごいに叶かなひし愛嬌あいきさま必ずかならず龜相かめさうのないやうに心こゝろを付つけて何処どこまでも男をとこの本意ほんいを忘れぬやう物ものの見事みごとにすつぱりと、ヤア、サア、劔つるぎの舞まひの一手ひとて所ところ為な急いそぎと心を落おち付つけてならふ」支こなら助太刀すけだちになるべき人ひとをかたらひて大支だいじを取とつて本望ほんもうをと言いはれてお亀かめハ小膝こひざをすゝめそんならお前まへハ何なにもかも委くはしい子細しさいを御存知ごんじで吾儕わがしを手引てびきなさるかと言いへバ老女らうぢよハ目めにもらし涙なみだを袖そでにて押拭おしぬぐひお前に問とはれて箇様かうようといふも面おもなき吾儕わがしが身のうへ始め吾儕わがしハ下総しもふきの真間まの里さとに住託すまわし賤いやしき者の妻つまなりしが薄命うしなはせにて夫子つまこを亡失うしなひ烟むらりを立たつるよしもなくほと

く難義の折柄にお前の父公三郎さまの出生給ひし時なれば吾儕に  
乳房のあるを倅ひ父公の乳母に抱へられ何不足<sup>15</sup>なき身となりて  
御恩の中に幾稔月送る恵みハ知りながら思按の外とて耻かしや御家  
の若黨小忠二と互ひに思ひ思はれて忍ふ枕のその数ハ阿漕が浦に曳  
鯛の度重なれば人目にも立し浮名に詮方なく三郎さまの十二の年  
二個ひそかにお家を立退き少しの知音を心當に武藏の芝浦に身を  
落付夫ハ綱引の所為をなし吾儕ハ僅かの賃仕事或ハ人に雇はれな  
どして細き煙を立るうち倅なき時とて小忠二が風邪の心地と打臥  
しが次才に重る病勢に薬餌の甲斐もあらバこそ早に「黄泉の鬼と  
なり憑む木蔭も荒磯の芝浦にさへ住かねて此鎌倉にさすらひ來つ、  
始めを言へバ御主人のお目をかすめし御罰ぞと思へバ再度夫に嫁  
せず嬌ぐらしに為馴たる針持つ業を渡世として一箇の口をやしない  
つ、井稔ばかりを送る中も先非を悔はぬ日迎もなく何卒今一回息あ  
るうち手古奈<sup>名をいふ</sup>のお家に帰參をと思へド罪ある此身ゆゑ心はか  
りて詮もなく却て陰陽を經る程に風便に聞けバ三郎さまハ非業の御  
寂期その子細ハ那お妾のといふ折しも長谷寺詣の遊客<sup>16</sup>」も  
四五個連立どやぐとお亀が店に入り來るにぞ二女ハおどろき其  
儘に此物語ハ果にける

作者日はよりお亀が身のなりゆき最長くしき支なれば今此  
編綴りがたし末間にいたりて細しかるべし看客よく心し  
て前後を合せて観給へかし

貞操婦女八賢誌二輯卷之二了「白」<sup>17</sup>



第十七回

由井が濱に花の方舩樓を備  
金言を折かれて八代耻辱を蒙

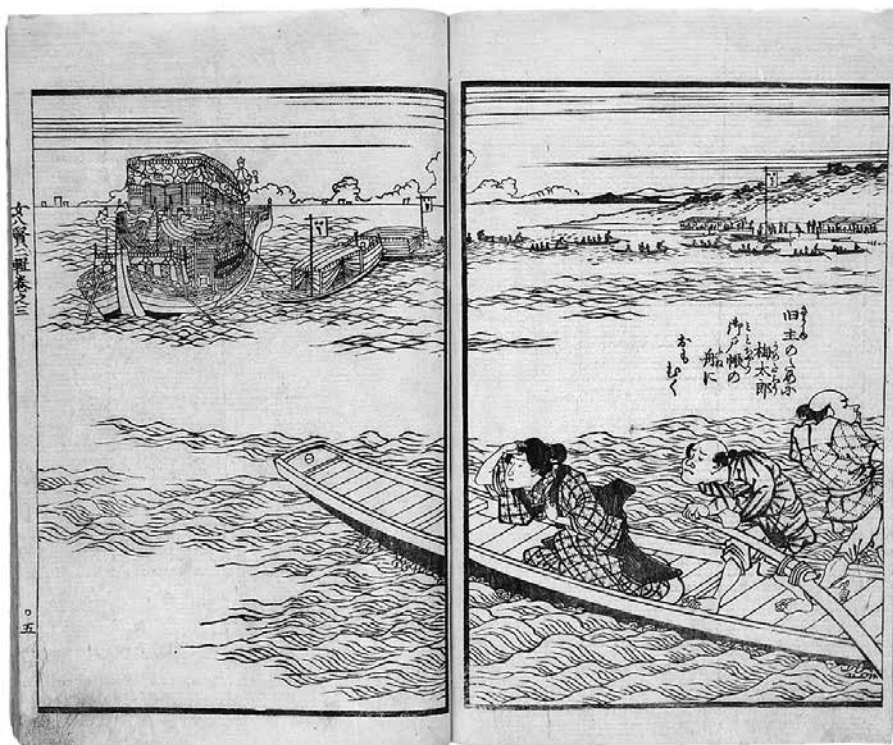
新拾遺集に鶴が岡木高き松を吹風の雲井にひびく萬代の声と詠けん  
抑 相模國鎌倉郡 由井郷雲井の峯鶴が岡八幡宮ハ康平六年秋八月  
伊豫守源頼義奥州征伐の時初て勸請あられしが永保元年の二月  
陸奥守源義家修造を加へそれより後代々の武將尊信尤厚かりし  
とぞ今日なん三月の初旬社頭の花ハ爛熳と咲揃ひ空に知られぬ花  
の雪松の「小枝に降つもる景色のみかハ桃季山吹椿海棠の盛あら  
そふ境内ハ春の詠の時を得つ御園の花に亦まし築て最興深き其吉趣  
を花の方に申せしかバ御館の女中心樂しく未明より髪化粧劣じ眞  
じと出立ハ由井の濱辺にうち寄る梅の花貝櫻貝姫貝ぞとも准らゆ  
る従女あれハ稚ハ唯兒安貝愛らしき姿色添風情とハ後刻の浦曲を  
思ひやる人の噂に有ぬべしされバ某日の巳の刻頃俱供を揃へ  
つ、扇ヶ谷の館を練出し鶴が岡に社參を遂られ午の刻の半時にいた  
る迄境内の花を躑躅に詠め給ひ漸々に由井の濱辺に近付て遙に  
向方を見渡し給へバ貴賤の道俗男女を撰まずさしもに曠き砂原を

絡繹として押續き東ハ景政の「塔の邊より西ハ盛久の松の側まで  
連々たる夏林の如し斯て花の方ハ乗物を由井の若宮の辺に留止ら  
れ多くの従女に仰附て既に磯際にいたらせ給へバ通船に乗參らせて  
飾備へし大船に頓てぞ移ししまゐらせけり這時ますます香木を備へ  
たる小船の這所彼所より乗出し我もくと漕つゞ御戸帳拜の  
も、ち船往來のさまの賑はしく弥生の海の閑麗に潮も遠く引霞江の  
嶋山の晴渡りて風景いはん方もなし斯て花の方ハ二階造りの御船の  
上間に在して遙に沖の方を詠め亦陸の方を視かへり給ひ榮ある業を  
なしけりと心の中に喜悅兼ての仰なりけれバ參詣の貧しき者に永樂錢  
を施行せられ如斯に計はゞ山内殿へ」聞えても外聞悪くハ有べから  
ず先に山の内の奥方より笠森の觀音へ奉納あられしと稱錦の御  
戸帳ハ蜀江の錦といふ噂のみにて鎌倉中の人々が今日這様に群集  
して持囉ほどの支ハあらざりし今奉納の御戸帳ハ山内の奉納よりは  
るかに日數の遅後たれど施行を以て下を賑はし錦の戸帳も諸人に知  
らせて後々迄も語り傳えん斯レバ此度の催しハ彼方さまの鼻を挫  
扇が谷の威を輝す誉れとなりしぞ嬉しけれ定て市街の風聴も這方を  
こそ賞讃てぞあらんと自慢心の在せしかバ其下情を穿り來よとて  
八代と呼ぶ下仕の女中未青年處女なれども心賢き者なりとて今朝  
最」早く風聞を聞する爲に恣を省させひそかに出し遣られしが只

今踊り参りしとお次の衆の取次バ花の方ハ鈍しげに夫ハ待侘しく在つるものを下仕なりとも苦しからず目通ひ許す疾這方へと急がせ給へバ其佞に御側女中ハ聲々に呼立く呼次バ常にあらざる御仰に心驚く八代が固辞申せど聞入なく頓て御前へ誘引バ八代ハ耻らひ億れ怕々其席に踞居を花の方ハ聲係給ひ太儀にありしぞ八代とか蜜支を申付たれば心置なく近歩進みて街の噂を聞せよかし奈何申て居つるぞ此度の妾が計らひハ山内殿に肩を取せ當家の威光を増所爲とハ定めて言も傳るならん左ハあらずやと」仰すれば八代ハ漸く首を少し上ながら左右を顧會積して「何なたぞ何卒お取次を」苦しふなひ早ふ言て聞しやいノウ「左様ならバ御免を蒙りまして申上ます」サア「早ふ聞しやいノウ」有の佞にハ恐れ多く申上るハ不遠慮とお叱り被遊ましやうけれど申上ねバ不忠となる他の噂も君の御爲に女中がしら「早ふ申上やいのう」かしこまりましてござぬます今朝お館を出まして諸所の人立彼所の辻知らぬ風俗して聞きましたれバ氣々種々の噂事一様でハござりませぬが眞眞の評判ハ勿体なひ支ながら芝居の噂と同じ支山内さまを誇るがあれバ御家を笑ふ人も亦憎ひ様でも理の當然を申」者がござぬまして「八代どの前後を心得て御機嫌にさはらぬ様に宜く申上られよ」イ、ヤ善悪何支も隠すに不及早ふ言「彼は申す其中に本覺寺の門前に倚こぞりました

『貞操婦女八賢誌』

多くの諸民夫等が批判致のをよく聞て居りましたら御前の支を憚なくお噂申ス憎い奴「妾が支を何と云て其方逆腹を立たのぢや」サア「折角御家の御威光を山内の御繁昌に劣らせまじと思し召て此御催の大施餓鬼御丹誠を水の泡に申消すのも下賤の癖恐れ多くハござぬますが御前様の支を遠慮なく名聞らしい披成かた上總の國の笠森寺へ御奉納の品ならバ何をお上被成ても御志ハ通るのに山内から奉納の蜀江の「挿絵第六回」錦の御沙汰が羨しいと思し召て大人氣のなひ此度の御趣向笹蔓錦と大壮に他見を飾る船樓殊にハ名木焼香と仰出された底心も御殿に伽羅がすくなひゆゑ小袖に留木の支を闕て召集られるものであらふひけらかされる御戸帳も元を糺せバ他家の物「これハしたり八代どの譬バ下賤で申とてマア其様な失禮を」イヤ聞かけてハそれなりに聞捨られぬ這身の耻後の覚悟になる支も又あるまじきものでもなひサア其後ハ何と言た包まず申て聞せてたもいと温順なる御尋に亦八代ハ遠慮なく「御殿の中でも委しくハ知らぬ錦の御戸帳を何様して聞傳へて居ますやら笹蔓錦の古渡りのと仰山に評判」しても以前ハ武藏の豊嶋家に傳來した錦の古旗當時でハたしか敵味方と争ふ中の豊嶋の重宝越路の長尾へ分捕になつた噂ハ聞たけれど扇が谷の管領へ敵となつた両家の中からさし上られる由もなひ関の

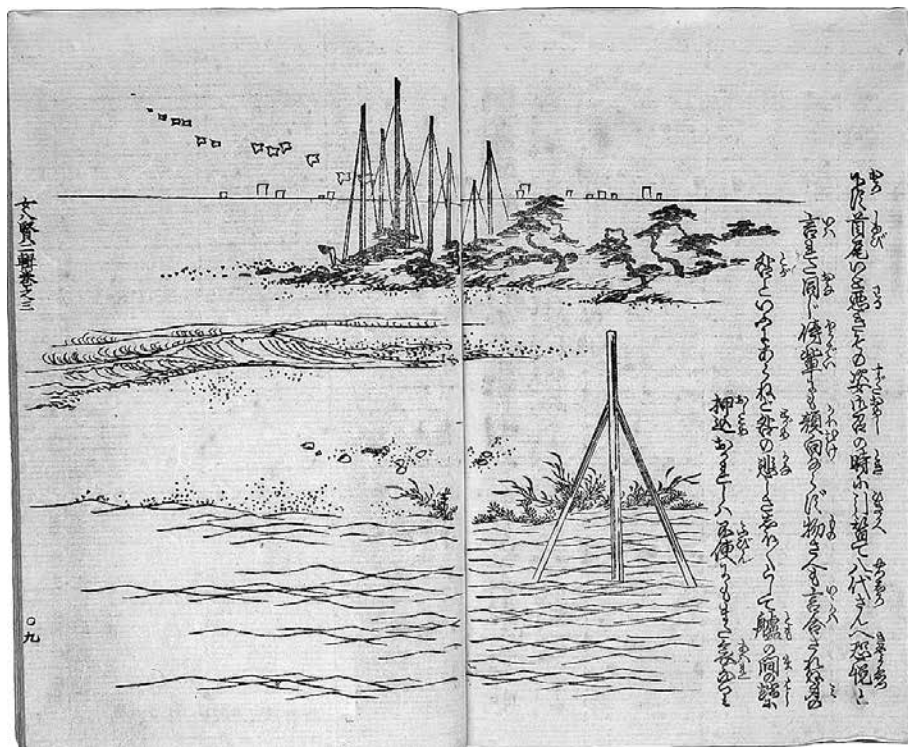


旧主のために梅太郎御戸帳の舟におもむく

東を管領の御家に似合ぬ僂忽の計ひ非禮ハうけぬ神佛に備へる錦  
 の出所が後ぐらくハ明るみへ出した御家の耻で有ふと口さがなくも  
 申ました「ア、コレ八代餘りな怒れ多ひ其言葉それを其方ハ阿容  
 ミと云れて聞て帰つたのか奈何女子の身なればとて御館に仕な  
 がらなせ其俵に聞退して放心ミと御前へ出やつた只今きくさへ  
 口惜い下輩の謗言」  
 サア其時ハ私も勘忍ならぬ惡態と腹立しく  
 ぞんじ」  
 ましたが諂る中にも道理かと思ひ當る支がござるまし  
 たゆゑ知らぬ模様で帰りますも密々の御下知の事聞逃したハ臆病  
 とか思召のハ迷惑に  
 シテ惡態も道理とハ何故申すかその分解を  
 サア聞ませう八代どの御前の支を下輩が諂るも道理と言やるのハ  
 お主さまをおろそかに思ふ其方の不届千萬不忠でござる慮外の  
 言葉  
 「イ、不忠でござるませぬ御前さまの前ばかりを誂かざる  
 輕薄を忠義と思召ますか御役ハ賤しい下仕へもお側を放れぬ八代が  
 心の底ハ一日に千度百度お案じ申御災難でも無様にと祈らぬ節ハご  
 ざるませぬ近頃御側の衆女さんが前後思はぬ御奉公災ひハ下から  
 とやら山内の御館も扇が」  
 谷の御館も車の両輪に譬た御家同じ血  
 脈の管領職 両管領と崇れ勝劣ハなひものを御前の首尾の能様  
 にと纒言を申あげ山内さまと御不和になる御家の大支を考へず  
 にと角他見の噂にも角立様な御計ひ容易支と思召か山内の奥さま

と御前さまとの簾縁ハ御表さまの御大切若も両家の御争ひとなり  
ましたらバ其時ハ隙を窺ふ他心御家も危く御威光も自然とうす  
くなります道理実ハ此度の御催しも下輩の噂の通り出所の慥でな  
ひ錦の旗を御戸帳とハ恐れながら御上の御籠相今日の御供でなひゆ  
ゑに思ひの俣を申ますが笹蔓錦を差上て御側へ近く出度と申て御  
取立の於道さま異しいお人じやござりませぬか万一御家に仇あるも  
のか敵の方のまはし者か」素生のわからぬ疑はしきそれを放心  
ごひぬあつて何様やらあぶなひ御油断と常々お案じ申上ます又笹蔓  
の御戸帳も他所の御家の古衣と聞へますれば由なひ品今日此様に晴  
がましく鎌倉中の人々が持離ても笠森寺へ御奉納の後の日に豊嶋の  
家から取かへしに参るまひとハ申されませず取かへされたら御館の  
耻となりそな思し召し付恐れながら衆人から御前へ御異見申上てお  
止 被遊御恩案あらバ夫こそ忠義の御奉公と乍 憚 八代が存じま  
するト健氣にも言出したる主思ひ女子に稀なる諫の言葉も耳に  
さからふ花の方御氣色あしく八代を白眼つめて在せしがお側の  
左右を見かへりたまひ 何とか聞しぞ衆女人この八代が慮外の  
言葉申付たる役目を他に他の誹「謗を請継で妾へ對し悪口をい  
たすに同じ諫だてかたはらいいたひ無禮の少女目通り早く退けヨ  
急度計ひ糺明せいト仰の下より立かゝる役目の女中ハ八代を舌長

なりと心に憎み扣へて在し度なればお下知を待兼たりといふ風情  
をなして追取巻 サア立ませい八代どの餘りと申せば失禮  
至極 〆お側にお人もなひ様に 〆お奥へ出られぬ身をもつて御船な  
がらも御前へ御目見 〆勿体なひほど有難ひ御恩を思ふはづの所  
を 〆身の程知らぬ罰あたり サア立ませぬか不屈ものト言れてさすが  
八代八年もゆかねばはづかしく面目なげに顔赤らめ眼に涙をうかめ  
つ、忠義の心ハ露ほども知らし召すや口惜と思へど何と控方も荒け  
なき辻左右から手を捕てぞ引 〆下す首尾いと悪きその姿御召の時に  
引替て八代さんへ恐悦と言れた同じ傍輩にも顔向ならず物さへも  
言合されぬ身の咎といふにあらねど咎の悲しさしほくとして艫の  
間の端に押込おかれしハ不便にもまた哀なり 〔挿絵第七回〕 這時  
神宮の孝子なりける大塚の里の梅太郎ハ義父李兵衛が越路より帰り  
来れる途中にて横死を遂る其期に失ひたりし豊嶋の重宝笹蔓錦の  
御旗を尋る爲に故郷を立出心を配る千辛万苦諸方を久しく徘徊な  
せしが今日鎌倉の地に來り長谷寺の境内に休みたる折しも由井が  
濱辺の船施餓鬼錦の旗を御戸帳に仕立られしと聞よりも胸轟かし  
て驚きしが思案を極め姿を繕ひ彼所よ此所よと小船をあさりて稲村  
が崎の辺りまであはたしくぞ求めける



此の首尾の船は、その先づきの船の跡に引續て、八人へ恐怖と  
 許し罪才女船樓向二捕手一  
 許し罪才女船樓向二捕手一

第十八回

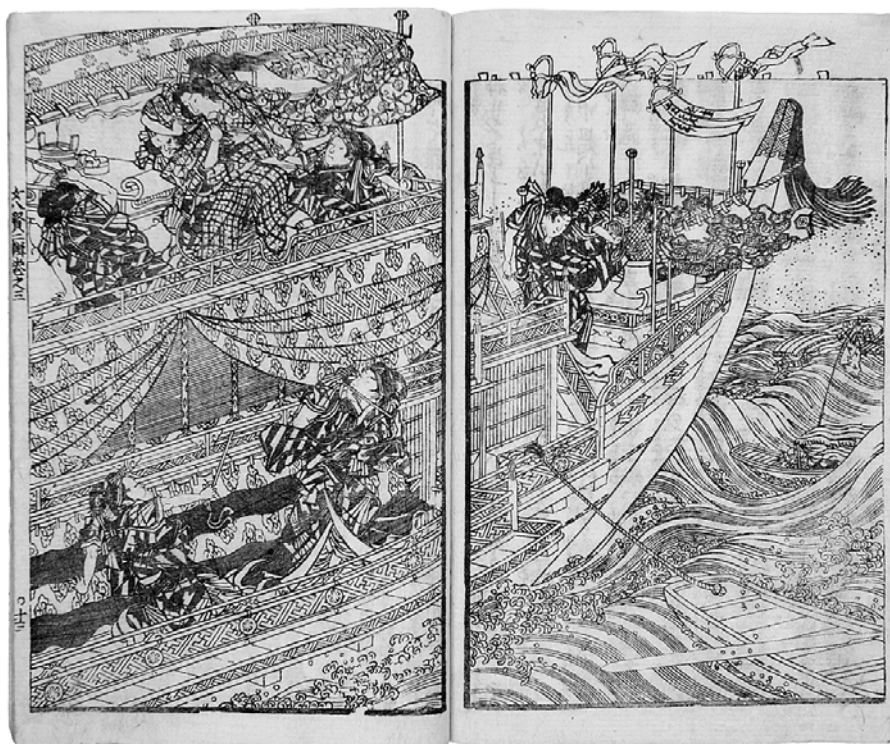
賢女勵志御戸帳於船登  
 許し罪才女船樓向二捕手一

斯て其日の申ノ刻の頃にいたり船と陸との參詣人また見物の貴賤男  
 女も半分に過て帰路に趣き施餓鬼供養の僧衆も早經文の紐を結び  
 船樓をしりぞき小船に乗て岸に上り花の方の帰館を待て寺に帰ら  
 んと扣へたり此時稲村が崎の方よりや乗出しけんと思ふ一艘の早舟  
 たちまち御戸帳の船に乗付しが其小船より船樓の船に上る者ハ歳齡  
 二八ばかりの美麗處女なり手にハ名香の疊紙を携御戸帳を守護  
 せし下仕の女中四五人扣へたるに會釈して第三重の上に登りて  
 彼香包を開き焼香をなすかと見れば左ハなくして手早くも御戸帳  
 を引下し押疊て腰帯を解き十文字に絞どりて背中に肩樓の上より  
 聲高く「二階の間に居たる下仕に向ひ御戸帳守護の衆女さんへ御  
 苦勞を係ましてお氣の毒にハ存じますが這御戸帳の元の主豊嶋  
 左衛門信國の家來神宮秀齋の娘梅と申もの養父左兵衛が過失ひ  
 たる錦の旗只今申賜りまして古主の豊嶋へ持帰り君と父との耻辱  
 を雪め古郷へ飾る錦の旗笹蔓の名ハ帰參の手づる花の方さまへ此  
 段をよろしき様に御披露を御頼み申上ますト聞て驚く下仕の女中思  
 ひがけなき大膽の言葉に何と返答なく暫時猶豫在けるがさすがに

建武年中より今にいたつて合戦の絶ぬ世界に生れ出て武家に仕ゆる  
女中なれば互に顔を見合しが氣を励まして樓の上を白眼ながらに  
大音上へ扇が<sup>10</sup>谷の御威光も御場所がらをも弁まぬ田舎處女  
が大膽な願とあらば御館の役人衆へ傳手を求めて叶はぬまでも願  
はひで恐れ多くも御戸帳を手込にせうとハ命知らず堪忍ならぬ覺悟  
しやト異口同音に聲かけて先一番に走せ上るハ下仕の中の勇壮もの  
身繕ひして頂上の階子を既に飛上り引下さんと組付バ後より續て  
三四人登る階子の上り口梅太郎ハ一聲叫んで組れし手先を振ほど  
きはづみをうつつて投出せバ下より登る階子の口續く女中の首の上  
より投落されて一同に上る階子を踏はづしばた／＼と仰さまに  
倒れて急所の同志うち唯がや／＼と騒ぐのみ折しも海上に異し  
げなる黒雲の靉靄として霏霏上ると見へしが見越が嶽のかたに當て  
春雷の音空に響きければ船長等ハ大きに周章驚彼戊亥の大風が  
吹出さんとするさざしなるぞ源氏山の山おろしに吹散されな用意せ  
よと闖立て碇を引上岸の方へ漕近付んと梶を取直し艫を押ならべ  
立騒ぐ又御座船の二階の間にハ遠眼鏡をもつて先刻より沖の景色  
と御戸帳船の往通ひを見て在せしが唯今異しき白痴あつて御戸帳  
を奪ひ取んとするを守護の女中が左ハさせじと争ひたれども竟に  
不及船樓より下の間へ打落さるゝ其風情言の葉ぐさハ聞へねど亘

『貞操婦女八賢誌』

の模様ハ手にとるごとく眼前に見へけるゆゑ花の方ハ御顔色損じ  
最腹立しき御聲にて「アレ見よ只今船樓へ恣やさしき處女が参り錦  
の戸帳を盗取逃んとするを女子どもか」押止めて遣らじとすれど  
既におよばぬ形容ハ凡常ならぬ曲者ぞや取逃さぬ中此船より早く  
加勢の者を遣りヤトはげしき仰せに御側の女中はハと驚き沖の方を還  
に視やれば汐けむり俄に立て浦千鳥の群飛まゝに風そよぎ今迄あり  
し百千船ハ皆悉く渚に帰り只御戸帳の船ばかり大船といひ高樓の  
船足おもく自由をなさず海の景色の變りしさへ心に怖るゝ女中  
達雷の音高くなればものおそろしくなかく／＼にお下知を請て梅  
太郎の打手に往んと言者なし元來御供ハ女中のみ侍衆ハ由井の  
若宮に扣へさせ船にハ水主のものばかり奈何になさんと闖けバ花の  
方ハ氣を苛て立上り給ひ「女子の催す」挿絵第八回<sup>12</sup>」所爲に  
もせよ管領職の奥方と稱るゝ妾が眼前に最口惜き此有さまざりと  
て一人の處女が狂氣に等しきいたづらを取押んとて侍達を陸まで呼  
に遣られうか誰なりともも女子の中にて捕手の役を申付よ八汐ハ在  
らぬか奈何にせしぞトいら立給ふ其席へ下家の間より階子を上り  
御前に手を下げ中老八汐「俄の亘のお人撰み誰彼と申ましても  
遠慮を致す大丈のお役手間どりましてハ取逃して「イ、ヤ通ひの船  
の者ハ何所へか逃去つて戸帳を飾りし元船の外に左右に船もなし此



方から乗付るまでハ逃道のなひ船樓前後思はぬ不覺ものを捕とて  
 難ひ支でなひ些も早ふ捕手の役をト仰せの中に風荒く見越が<sup>13</sup>嵐  
 より吹下し高波立て御座船さへゆらめき出し浮沈ます〜雷鳴はげ  
 しくなれば捕手の役を心に怖れ顔見合せても眼のくろめく八重の  
 汐路の汐烟り言葉もなくて扣へたり其時八汐ハ花の方に向ひ礼義正  
 しく御機嫌をそむきました鹿忽の者を間もなく御免をお願ひ申  
 ますのハ恐れ多ふござぬますが火急の支ゆゑ申上ます先刻の落度  
 に付て押込申付置ました八代が忠義の志申過しを恐れ入て後悔  
 いたし居ます取中只今の一大事何卒手柄をいたしまして夫を功に  
 御詫言命を係て勤ますると健氣な願ひを申ますゆゑ恐れながら何  
 ひますト取次口上花の方ハさしかゝりたる」大役を誰にと思ひ寄給  
 はねバ是非なしと思しけん<sup>花</sup>しからバ暫時ハ免して遣りや功を  
 立たら其時ハ罪もゆるして取立る早ふ〜トせき立給ふ御意に一座  
 ハホト息八汐ハ急に艫の間へいたりて八代を呼出し<sup>八汐</sup>其方の願ひ  
 ハ此八汐がとりなし申てお聞濟些も早ふ小船に乗て<sup>八代</sup>エ、有がたふ  
 存じまするといふより早く立上り小袂取る手も手ばしく艫に擦し  
 傳馬船に忽ちひらりと乗移れば水主の中にも撰れし達者の二人が  
 艫を押切てエイ〜聲に漕行バ樓の船も渚の方へ漕返さんと梶を取  
 艫拍子うつて聲限り風に向ふて働く難溢樓の上には梅太郎が乗來し





【挿絵第九図】

小船に逃たられ殊に階子の下にて八下仕の「女中が追取巻階子を下らバ其足を閉めて補んとかまへたり船を浦辺へ寄せられてハ敵の大勢かさなりて奈何にすると退れまじいかハせんと胸をいためいさ、か勇氣の折けしがまた情と思ふ様兎ても退れぬ一大事命係とハ最初から知れたる所爲をなしながら何今更に驚くべき既に豊嶋の名を出し笹蔓錦の御簾をバ我手に入れて背に負たれバ再度敵の手に渡さんや命の限り切扱なん叶はぬ時ハ此俣に青海原の底に沈み浮む瀬

ぞなき我魂を御簾に止めて守護を遂げいつしか古郷に送るべしとおもひ極めて憤然と四方を白眼船樓に突立あがりし容体ハ大丈夫めきて手弱女かに花と「見まがふ顔ばせに柳の眉の清くして雪より白き腕を長く延して柱をとらへ棲からげせし裾高けれバ紅ひの湯具脛に係りて風のそよぐに肌を顕はし紅白の花の咲るがごとしそもく宋朝の女大將一丈青がいます

梁山泊に入らざる姿か堀川御所に夜討を防ぎし静御前の俤に准らふべきか譬ていはん方もなし此時風はますく強く沖の方へと吹おくれバ八代の乗る早船ハ順風ゆゑにいと早く既に御戸帳の船に近付ども波と風とにゆりあげられゆり下されて幾度か右より左と漕まはり近付かるとすれば隔てられ同じ所をくるくと廻る危き怖しさ遙に此方の御座船さへ」

【挿絵第九図】

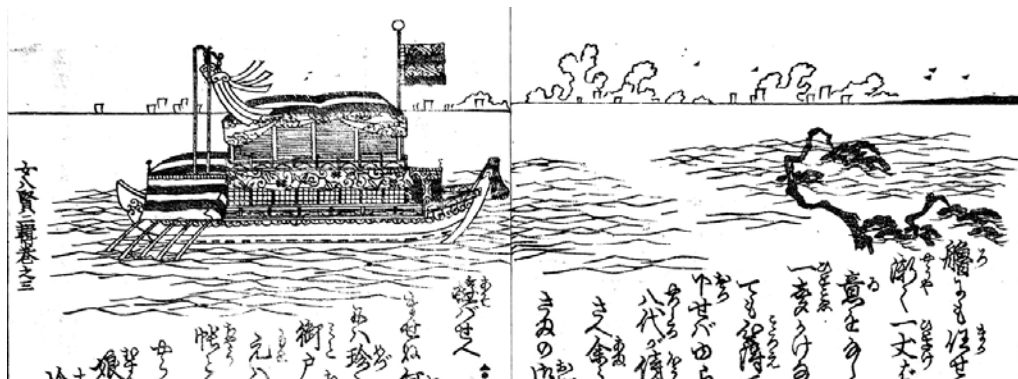
浪風荒きを凌ぎかねまた陸よりも早船にて無理

に帰館を催促つ、まづ花の方に進め申漸々陸へ上參らせて濱辺に暫時御乗物を備へ直して沖の方をまたぎもせず見そなはせバ多くの女中ハ左右に居ならび花の吹雪と白浪の飛散る磯に花紅葉卵の花菖蒲萩桔梗と名に呼ぶ四季の美人草入相の鐘に猶ちらでおのく沖を詠めて居れりされバ晴なる八代が捕手の業も船の上昔立までに心せけども水主が手練の」

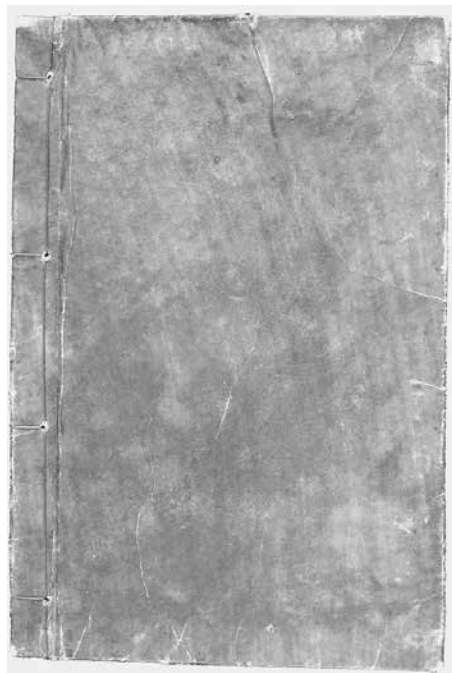
【挿絵第十図】 船にも任せずまたく暫時はたらしが此度ハ漸く一丈ばかりに乗近付けバ八代ハ兼て用意をなしたるか鍵繩の端を繰しこきエ、いと一聲かけながら大船の縁にうちかければ彼方にも心得て力を極め引寄つ、頓て階子をさし下せバゆらめく足元踏しめて難なく上る八代が傍輩に會釈をし、衆女さんの手にさへ余るを嗚呼がましいと思し召ふが奥さまの御下知でござるますから何卒御免を」遊ばせへ

「イエ、些もその様な御遠慮ハ入ませぬ何所から參つた處女ぢややら町方にハ珍らしい上品の能娘と油断のうち御





戸帳を引下して古主の家へ持て  
 行元ハ豊嶋の家の簾他家の宝を  
 御戸帳とハ管領職に似合ぬ所爲  
 と何様やら理屈のある様に豊嶋  
 か歳増女か娘の癖に思ひの外の  
 大膽もの命を捨てても笹蔓錦を  
 取返してと覚悟のはたらきか  
 ならず油断をなさんすなト聞て  
 八代完余と笑ひ「たとへ豊嶋  
 の重宝でも扇ヶ谷の奥方さま  
 の御手に入つた笹蔓錦今更他  
 の手に渡さふかとハ言へ今日  
 のお催し此船樓の上にある龍  
 の腮の玉とやらいふにもまさ  
 る錦の簾必死でなくてハ出来な  
 ひ業定て覚への曲者で私の手に  
 はいかゞの大役衆女さん加勢を  
 して下さんせト言葉は卑下して  
 言ながらも勇氣ハたゆまぬ八代



【後ろ表紙】

が身繕ひして早禱怖る、色もなか／＼に臆せぬ女丈夫が梢をわた  
 る猿の如く一重二重三重の樓の上を白眼ながら、いかに豊嶋の御内  
 の女中「扇ヶ谷の御威光をおそれぬ所爲ハ健氣でもおよばぬ度を女子  
 だてらに前後思はぬ愚のはたらき翼がなふてハのがれぬ海上サア  
 尋常にその錦を此方へわたして託言しや管領の御内君花の方の仰を  
 請け捕手に向ふ八代が慈悲の縄目に用捨をしてト言を聞とる梅太郎さ  
 てハ手覺あるものならんと隠し持たる白刃を拔出し御簾の結目しめ直  
 したより上る八代を今や遅しと待かけたなり  
 貞操婦女八賢誌二輯卷之三「白」18